「ツァラトゥストラ」第4部の構造に関する試論

株　丹　洋　一

I

第4部においては，時刻が重要な役割を果たしている。[1] 第4部全体は20章から成立しており，2昼夜余りの時間内に起こったことを記述している。即ち，第1章が1日目の出来事を，次の中心の18章が2日目の出来事を，そして，最後の第20章が3日目の朝の出来事を述べている。それ故，第4部全体は時間的にまず3つの部分に分けられ，最初の第1章と最後の第20章とが，中心の18章を間に挟んで対応している。中心の18章が述べている一日には，歴史的時間の経過が象徴的に表現されている。そのことは，人間が動物と超人との間の軌道のまん中に位置する時を，ニーチェが大いなる真昼として定式化していることと合わせ考えれば，一層明らかになる。[2] 中心の18章は，前半の9章（第2～10章）と，後半の9章（第11～19章）とに分けられる。前半の9章は昼の出来事を，後半の9章は夜の出来事を述べているからである。注意をして読むと，前半の9章は朝から真昼頃までの出来事を描いており，後半の9章は夕方から真夜中頃までの出来事を描いていることに気がつく。ツァラトゥストラは，より高い人間を捜し回って，その日の午後をまるまる無駄に過ごしたと述べられることによって，午後が一見注意の外に置かれ，その日の他の時刻とは異なって詳しく描かれないことを，見逃すわけには行かない。なぜならその結果として，まず第一に，マンフレート・ラウが指摘しているように，前半の9章と後半の9章とは形式的（章の数）にも時間的にも対応することになるからである。[3] 更に第2に，おのおのの9章は，昼あるいは夜の前半部のみ

を描いていることになるからである。これは意味のないことではない。おのおのの9章は，我々に「ツァラトゥストラ」全体を連想させる。というのは，「ツァラトゥストラ」は，大いなる真昼へと向かう人類の歴史的一日の前半部を描こうとするものだからである。更に，前半の9章は，第2～9章と第10章とに分けられる。始めの8章は朝から真昼前までの出来事を述べており，第10章は真昼の出来事を述べているからである。同じように，後半の9章は，第11～18章と第19章とに分けられる。始めの8章は夕方から真夜中前までの出来事を述べており，第19章は真夜中の出来事を述べているからである。

つまり，第4部全体は時間的に次の6つの部分に分けられる：第1章，第2～9章，第10章，第11～18章，第19章，第20章。更に，第1章は第20章に，第2～9章は第11～18章に，第10章は第19章に，それぞれ時間的・形式的に対応している。

注

1　ここで言う時刻は，Tageszeiten のことである。「ツァラトゥストラ」において Tageszeiten の果たしている役割の重要さを，内沼幸雄氏が指摘しておられる（「精神医学から見た『ツァラトゥストラ』―その基本構造について―」，「思想」，1973年10月号）が，それは第4部において特に重要な機能を担っていると思われる。

2　z. B. Nietzsche, Also sprach Zarathustra, Kröner, 1969, S. 84.

3　Manfred Rauh, Die Einsamkeit Zarathustras, In : Zeitschrift für Religion- und Geistes-geschichte 21, 1969, S. 63.

Ⅱ

最初の章，「蜜の捧げもの」は，第3部の終わりから何年も経ったある日，ツァラトゥストラの洞穴の前で始まる。ツァラトゥストラの髪は白くなっている。彼は自分の鷲と蛇に向かって言う。

「わたしはもうとうから幸福など，追い求めてはいない。わたしの追い求めているのは，わたしの事業だ。」[1)]

第4部の冒頭においてツァラトゥストラは，自分の事業の完成を志していることを宣言する。彼の事業については，第3部の「不本意な幸福について」の章で既に述べられている。

> 創造者はかつて道連れと，自分の希望の子どもを求めた。そして，見よ，創造者は，みずからまずそれを創造しないかぎり，見いだしえないことがわかった。
>
> こうしてわたしは，わたしの子どもらのもとに行き，また彼らのところからもどりつつ，わたしの事業のさなかにいる。[2)]

自己の没落を完成するために，ツァラトゥストラはまず自分の後継者を創造しなければならない。そのために，自分の弟子たちのもとに行き，また彼らから離れながら，彼は没落を繰り返している。自分の弟子を育てあげることは，ツァラトゥストラの事業の一部である。しかしそのことは，彼の没落を完成するために必要な条件である。従って彼の事業は，自己の没落の完成，即ち，大いなる真昼の実現を目指すものである。「蜜の捧げもの」は更に，彼の事業が最終的にはツァラトゥストラの千年王国の建設を目的とするものであることを告げている。「ツァラトゥストラ」の以後の展開が，このように方向づけられている。つまり，「ツァラトゥストラ」はこの章以後，大いなる真昼の実現へと向かって進むのである。

ツァラトゥストラは，蜜の捧げものをしようとする。彼は，高い山の上でひとりきりになって語る。

> わたしはまだ，わたしの降りて行くべき時のしるしを待っている。しるしがあれば，どうあっても行かねばならないが，わたし自身，まだそんなぐあいに，人間どものあいだへ降りて行けないのだ。[3)]

ツァラトゥストラが自分の事業を完成するためには，彼の後継者が出現しなければならない。そのために彼は，3度目の没落の時が来たことを告げ

るしるしを待っている。それが彼の運命である。そのしるしについては，第3部の「古い板と新しい板について」の章が説明している。

——わたしの下降の時，没落の時は？ なぜならわたしはもう一度，人間たちのところへ行こうと欲するからだ。

それをわたしはいま待っている。なぜなら，それがわたしの時だということを示すしるしが，まずわたしにあらわれねばならぬからだ，——すなわち，ハトの群れを伴った笑うシシが。[4]

ツァラトゥストラの最後の没落の時のしるしとは，ハトの群れを伴った笑うシシである。「蜜の捧げもの」は，彼がそのしるしを待っていることを，もう一度改めて宣告している。

ツァラトゥストラは更に語る。

わたしが捧げものをすること，蜜のおそなえをするといったのは，わたしの話の策略にすぎなかった，……わたしが蜜をほしがったのは，ただ餌を手に入れたかっただけにすぎない。……わたしには，世界はむしろ底の知れない，ゆたかな海のように思える……わたしは今日，わたしのえりぬきの餌で奇妙きわまる人間どもの魚を釣るのだ！[5]

彼の運命がめぐんでくれる，ふざけたり，いたずらしたりする暇を潰す間に，ツァラトゥストラは自分の幸福を餌にして人間たちを育て上げようとする。しかしここで重要なのは，人間たちを育て上げるのはツァラトゥストラの暇つぶし・気晴らしであり，同時にそれは，彼が最後の没落のしるしを待っていることを意味している点である。

つまり，第1章は3つの事柄を述べている。すなわち第1に，「ツァラトゥストラ」は以後大いなる真昼の実現に向かって進行すること，第2に，ツァラトゥストラは彼の最後の没落の時が来たことを告げるしるしを待っていること，そして第3に，そのしるしを待っている間に，彼は人間たち

を育て上げることである。

しかしここで，第3の点に関して問題が起こる。というのは，第1の点と第2の点に関しては，先の3部において既に語られている。ここでは既に語られたことが，繰り返されているに過ぎない。しかし，第3点に関してはそうではない。ツァラトゥストラの言葉と行動は，彼の思想の継承者のみに向けられていると，序説で既に語られていた。そしてそのことは，先の3部全体を貫く大原則であったはずである。最後の没落のしるしが現れた後に，ツァラトゥストラは自分の思想の継承者に再会することになっていた。それ故，彼がこれから自分の幸福を餌にして育て上げようとする人間たちは，彼の思想を受け継ぐ者ではありえない。ツァラトゥストラが自分の継承者以外の人間を育て上げようとするのは，先行の3部を貫いている原則と矛盾すると考えなければならない。ツァラトゥストラのこの企ては，この章で初めて現れたものである。このことはいったい，何を意味するのだろうか。彼のこの内面的転身の理由に関しては，何も述べられていない。

注

1　「ツァラトゥストラ」S. 225.
2　　〃　　S. 148.
3　　〃　　S. 227.
4　　〃　　S. 186.
5　　〃　　S. 226f.

Ⅲ

第2章から第9章までは，ツァラトゥストラの翌日の午前中の行動を描いている。第2章は，年老いた予言者との会話の模様を述べている。ツァラトゥストラが洞穴の前の石の上に坐って物思いに沈んでいると，「すべては同じだ，何のかいもないことだ」と教える，大いなる疲労の告知者である老予言者が，突然現れる。彼はツァラトゥストラに，大いなる困窮と悲哀の波が高まってきており，自分はツァラトゥストラを同情へと誘惑す

るために来たのだと告げる。この個所で明らかに，同情によるツァラトゥストラの誘惑ということが正面切って打ち出されている。そしてこれは，第4部の主題の1つである。同情によるツァラトゥストラの誘惑が第4部の主題の1つであることは，第2部の「同情者たちについて」の章の一節が第4部の副題となっていることからも裏付けられる。[1] 危急の叫びが聞こえて来，老予言者が語りかける。

「あの叫びはあなたに向けられているのだ，あなたを呼んでいるのだ。……時が来たのだ，……あなたを求めて叫んでいるのは，より高い人間なのだ！」[2]

老予言者の言葉は，ツァラトゥストラを混乱させ，動揺させ，恐怖に落とし入れる。というのは，彼の弟子たちがじゅうぶん成長し，まずしるしが現れてから，最後の没落を行ない，彼らとともに大いなる真昼を祝うものと，彼はそれまで信じていたからである。それだから彼は，ずっとそのしるしを待っていたのだった。ところが今や，老予言者の巧妙な言葉に惑わされて，[3] 彼の弟子が現実に窮地に陥っていて，彼に救いを求めているのだという思いが，一瞬ツァラトゥストラの心を捉えてしまった。彼の最も辛い苦しみは彼自身の苦しみではなく，彼の愛する弟子が彼の教えで苦しむことだからである。[4] 彼は辛うじて気を持ち直し，激しい不安から立ち直る。けれどもやはり，その疑念を完全に拭い去ることはできず，彼はより高い人間を捜しに出かけて行く。

第3章から第9章までは，ツァラトゥストラと7種類の「より高い人間たち」（ロバを連れた2人の王，蛭の研究者，魔法使い，退位した教皇，最も醜い人間，自発的になった乞食，ツァラトゥストラの影）との出会いを描いている。ロバを連れた2人の王は，自分たちが第1級の人物ではないにもかかわらず，それを意味しなければならないことにうんざりしていた。だから賤民たちのもとから逃れ，より高い人間のところにロバを連れて行く途中だった。蛭の研究者は，精神の良心的な者である。彼は物事を

中途半端に知ることに嫌悪を抱き，自己の精神の良心に従って，他の一切を知ることを放棄している。蛭の脳だけを根底から認識するために，彼は沼の畔に身を伏せて，蛭に自分の腕を咬ませていた。老魔法使いは，精神のざんげ者を演じることによってツァラトゥストラを同情へと誘惑する。始めのうちツァラトゥストラは，老魔法使いの演じる苦しみを本物と信じて，彼の頭を両手で支えるが，まもなく老魔法使いの嘘を見破り，彼を杖で打ちつける。老魔法使いはしかし，やはり精神のざんげ者の1人である。というのは，彼は他の全ての人間を欺くことはできても，自分自身を欺くことはできず，彼の演じる吐気は彼の唯一の真実であって，彼は自分の邪な知識と良心のために凍えているからである。次にツァラトゥストラの出会った年老いた教皇は，彼の仕えていた神がある日余りにも大きすぎる同情のために死んでしまったので退位して，最後の敬虔な人間，すなわち，森の聖者を捜しに山の中にはいった。しかしその男は既に死んでしまっていたので，彼は次に敬虔なツァラトゥストラを捜し歩いているところだった。ツァラトゥストラはそれから，神の殺害者である最も醜い人間に出会う。この男の神は恥をしらず，彼の隠していた汚辱と醜さのすべてを覗き込んだ。この最も醜い男は，そのような目撃者が生きていることに耐えられず，自分の神を殺した。そのことで民衆が彼に同情を寄せるので，彼はその同情に耐えられず，ツァラトゥストラのもとに保護を求めて逃げてきたのだった。ツァラトゥストラは最も醜い男の言葉を聞いた時，激しい同情に襲われて，突然地面に倒れてしまう。ツァラトゥストラのこの突然の転倒は，最も醜い男への彼の同情がどれほど激しいものであるかを示していると同時に，彼の意志の自己統御の力が弱まっていることをも我々に洩らしている。しかしすぐに，彼はきびしい顔をして地面から起き上がる。ツァラトゥストラは更に自発的になった乞食に会う。この男は，最も富んだ者たちに対して吐気を抱き，自ら大きな富を投げ捨てて，自分の悲哀から脱するために，雌牛たちから反芻することを学ばうとしていた。最後にツァラトゥストラは，自分の影と名乗る人物に出会う。この男は永遠のさすらい人である。彼は真理を捜し求めている間に，目的も道も見失っ

てしまった。彼にとっては，すべてが徒労である。「影」の言葉を聞くと，ツァラトゥストラの心は悲しみに襲われてしまう。ツァラトゥストラは，途中出会ったこれらすべての人間たちを自分の洞穴に招いて，自分は更に叫び声の主を捜し続ける。

以上の「ましな人間たち」に共通して言えることは，彼らは皆，それぞれの理由によって困窮していて，助けを求めていることである。それ故全体として見れば，第2章から第9章までには，同情によってツァラトゥストラの誘惑を引き起こすための必要条件であるましな人間たちの困窮を描いているのだと言えよう。最も醜い人間との出会いにおいて，ましな人間に対する同情は，ツァラトゥストラを屈服させかねない危険であった。しかし彼はなんとか同情に耐えた。すなわち，ましな人間たちとの出会いにおいて，自己を克服することができたのである。けれども，それだからと言ってツァラトゥストラが，同情による誘惑に対して決定的に勝利を収めたと言うことはできない。

これらの8章はもう一つ別の意味を持っている。この意味は，構造上の理由から，第11章に至って初めて，ツァラトゥストラによって次のように明らかにされる。

> わたしがここで，この山の中で待っていたのは君たち（＝ましな人間たち）ではない。きみたちといっしょでは，わたしは最後の下降をすることはできぬ。きみたちはただ，すでにより高い者がわたしのところにくる途上にあることを示す前兆として，わたしのところにきたにすぎぬ，――[5]

ましな人間たちの出現は，より高い人間たちが出現することの前兆を意味するのである。より高い人間たちについては，同じ箇所で述べられている。

> ――より高い者，より強い者，より勝ちほこった，より快活な者をわたしは待っているのだ。笑うシシたちがこなければならぬのだ！[6]

より高い者たちとは，ツァラトゥストラの思想を受け継ぐ者のことである。だから，ましな人間たちの出現は，ツァラトゥストラの思想継承者の出現の前兆を意味しているのである。つまり，これら8章は全体として，ツァラトゥストラの思想継承者出現の第1の前兆を描いているのである。

注

1　第4部の副題は以下の如くである。

「ああ，世界のどこで，同情者たちのところでよりもより大きい愚行が行なわれただろう？　同情者の愚行よりもより多くの悩みを，この世の何が引きおこしただろう？

愛する者で，同情よりも高い境地を知らぬ者は，あわれだ！

……」

2　「ツァラトゥストラ」S. 230f.

3　老予言者の言葉には，ツァラトゥストラの深い関心を引き起こす「時がきたのだ，ぎりぎりの時がきたのだ！」，「あなたを求めて叫んでいるのは，より高い人間なのだ！」という表現が含まれている。この箇所で使われているより高い人間（*der höhere Mensch*）は，原文でやはり隔字体で記されている第11章のより高い人間とともに，その他の箇所で使われているより高い人間（＝ましな人間）とは異なり，より高い者（Höhere）の意味で使われている。

4　Nietzsche, Die Unschuld des Werdens II, Kröner, Stuttgart, S. 484.

5　「ツァラトゥストラ」S. 272.

6　〃　S. 272.

Ⅳ

第10章「真昼時」は，正午頃の出来事を述べている。この章は，第4部の構造を解明するために極めて重要な意味を持っている。さてツァラトゥストラは，「ぐるり一面ブドウのつるのゆたかな愛で抱擁され，自分自身に対して包みかくされている，まがりくねり，節くれだった一本の老樹のそばに通り」かかる。マンフレート・ラウの指摘しているように，この眺めにはツァラトゥストラの内面の状態が投影されている。[1] 曲がりくねり，節くれだった木は，ツァラトゥストラの精神である。それに対して，ブド

ウのつるは彼の魂である。すなわちツァラトゥストラは，彼の魂によって，彼自身の自己＝精神に対して隠されているのである。眠り込みながら，彼は自分の心に語る。

——静かな入江に走りこんだ船のように——いま船は長い旅に飽き，ふたしかな海につかれて，地に身を寄せかけている。……

一ばん静かな入江に休んでいるそのような疲れた船のように，わたしもまたいまは大地に近づいて休んでいる。大地に忠実に，信頼をよせ，待ちながら，ほんのかすかな糸で大地にしばりつけられながら。[2)]

このようにツァラトゥストラは，長い旅と不確かな海に疲れた船のように休んでいる。つまり，ツァラトゥストラは疲れているのだ。このことは，ひじょうに重要なことである。この点にこそ，ツァラトゥストラが彼の弟子以外の人間たちを育て上げようとするという「蜜の捧げもの」の章における突然の表明の理由を見い出すことができる。すなわち，長い間しるしを待つことが，ツァラトゥストラを疲れさせ，彼の精神の力を弱めたのである。それ故に，彼の心の中で同情が力を得て，ツァラトゥストラにそのような企てをさせるに至ったのである。弟子以外の人間を育て上げるという彼の企ては，その原因を同情に有しているのである。だから，ツァラトゥストラは第4部の冒頭においてすでに，同情の誘惑に陥っているのである。それにもかかわらず，彼はそのことに気付かず，従ってこの第4部の副題にあるように，自己の心中に起こっている同情を解決することもない。同情を抱くことは，彼の意志に矛盾している。この時には，同情はツァラトゥストラを屈服させるほどの強い力として描かれてはいない。それは，第1章において，幸福ではなく事業を追い求めるのだと彼が宣言していることからも理解される。ということは，ツァラトゥストラはそこで，彼の事業を追い求めるという意志と，同時にまた，その意志に矛盾するものである同情という心情とを持っているわけである。つまり，第1章においてツァラトゥストラの精神と魂の間に分裂が認められるのである。さま

ざまな種類のましな人間たちとの出会いによって，彼の疲れはいっそう増してしまった。最も醜い人間との出会いにおいてツァラトゥストラの危険は一つの頂点に達し，今や彼は疲れ果てて，休んでいる。

彼はささやかな渇きを忘れ，魂は幸福に浸る。

おお，幸福だ！　おお，幸福だ！　おお，わが魂よ，お前は歌いたいのだろうな？

おまえは草の中に横たわっている。しかしいまは牧人さえ笛を吹かないひそかな厳粛な時刻なのだ。

慎しめ！　あつい真昼が野原に眠っている。歌うな！　静かに！世界は完全だ。[3]

ツァラトゥストラには，世界は完全になったように思われる。しかし，これは彼の錯覚である。彼にとって世界が完全になる時は，大いなる真昼である。ところが，この瞬間は決して大いなる真昼ではない。なぜなら，彼はまだ最後の没落を行なってはいないし，しかも彼の思想継承者がそこにいないからである。それにも関わらず，この個所のツァラトゥストラの幸福の描写は，大いなる真昼を連想させるものである。ということは，この章では大いなる真昼の前兆が描かれているのだと言ってもいいだろう。

ツァラトゥストラの魂は，いつまでも幸福に浸ろうとする。彼の精神は目を覚ますように呼びかけるが，魂はそれに対して抵抗して，再び身を横たえる。魂の幸福はまさに，ツァラトゥストラを彼の事業から決定的に引き離そうとしている。第3部の「不本意な幸福について」の章で，彼は自分を包もうとする幸福を避けようとし，自分から去るように言った。[4] そして第4部の冒頭では，彼は幸福ではなく，彼の事業を追い求めていると述べていた。ところが今や，彼は自分の事業を中途で放棄しようとしている。まさしく，ツァラトゥストラは精神と魂とに解体してしまい，魂が勝利を収めようとしている。これこそ，ツァラトゥストラの深い困窮であり，危機である。このことを，幸福による彼の誘惑として捉えても差し支えな

いだろう。これが，この第10章の第2の主題である。

ツァラトゥストラの疲労には，特定の原因がある。すなわち，待ち続けているしるしの現れる様子が全くないという状況である。これがより深い原因である。ツァラトゥストラを疲労させ，彼に同情を抱かせるようにしたこの状況が，彼の心の中に自己の運命に対する疑いを呼び起こしたのである。このことが，すでに第2章の老予言者との出会いの場面において描かれていた。幸福によるツァラトゥストラの誘惑も，この同じ状況が引き起こしたのである。この状況が生み出した結果を，第10章において効果的に描き出すために，ましな人間たちの出現の意味は，第11章に至るまで隠されている。ここにおいて，ツァラトゥストラの危機は頂点に達している。

しかしこの時，「一条の光線が空から彼の顔に射し」，彼は突然目を覚ます。彼の困窮の最も深い原因は，待ち続けているしるしの現れる様子が全くないという状況であった。それ故，長く待つ間に彼の精神は疲れてしまったのだった。けれども，この困窮を敢えて肯定すること，「定かならぬもの，あえて試みられなかったものに対する快感」[5] を持つこと，つまり，「勇気」[5] こそが，ツァラトゥストラにおける必然的な困窮の転回である。一条の光線は，「勇気」を意味している。「勇気」は，ツァラトゥストラの本質として，第15章において改めて述べられる。このようにしてツァラトゥストラは，「勇気」によって自己自身を危機から救い出す。この瞬間以後，事態は快方に向かう。

注

1　Manfred Rauh, a. a. O., S. 70.
2　「ツァラトゥストラ」　S. 265.
3　　〃　　S. 265.
4　　〃　　S. 149f.
5　　〃　　S. 292.

V

第11章から第18章までは，ツァラトゥストラの洞穴での，夕方から深夜

にかけての出来事を描いている。ツァラトゥストラは，危急の叫びの主を午後中捜し歩いたが見つからず，自分の洞穴のところまで帰って来る。その時，叫び声が彼の洞穴の中から聞こえてくる。彼が洞穴の中にはいってみると，そこには午前中彼の出会ったすべての人間がおり，そこで，彼らが叫び声の主であることが判明する。彼らはみんな絶望している。すでに危機を乗り超えているツァトラゥストラは，彼らを絶望させたままではおかないと宣言する。この宣言はこれら8章の方向を決定するものであり，この宣言に従って，以後筋が進行する。ツァラトゥストラの蜜が効果を顕わし，彼に対する大いなる憧れが起こっていることを，2人の王のうちの1人が告げる。やがて晩餐が始まり，そこでツァラトゥストラは，ましな人間について語る。ましな人間は，「小さい人間たち」に絶望しており，その絶望がましな人間の高さである。しかしまたその絶望していることのために，彼は「半ば破滅した者」[1] であり，「出来損いの人種」[2] である。自分自身に悩んでいるだけで，人間に悩んだことがないという点において，ましな人間はツァラトゥストラと区別される。語り終えて，ツァラトゥストラは洞穴の外に出て行く。洞穴の中では老魔法使いが憂愁の歌を歌い，ツァラトゥストラの言葉によって絶望から回復しかかっていたましな人間たちの大部分の者は，その歌を聞くと再び憂愁に捉われてしまう。そこへツァラトゥストラが戻って来る。そして，勇気についての彼の言葉を聞いて，ましな人間たちは，初めて笑う。そうして更に，影のおどけた「砂漠の娘たちのあいだで」という歌を聞くと，彼らは陽気になる。ツァラトゥストラは彼らの陽気さを見て喜ぶが，同時にまた，彼らに対していささか反感と嘲りとを覚えて，戸外へ抜け出す。洞穴の中では，ましな人間たちがロバの祭りを始める。ところで，ツァラトゥストラが第11章で彼らに再会した時，彼らはみんな絶望していた。しかし彼の言葉によって，彼らは自分を笑い飛ばすことを学んで，陽気になった。そして今や，彼らの精神はロバの祭りを行なうほどはしゃいでいる。ましな人間たちのロバの祭りは，彼らが回復していることのよいしるしである。つまり，これら8章はましな人間たちの回復を描いているのである。ツァラトゥストラの彼らに

対する同情は，彼を屈服させるような強力なものではもはやない。それでもまだ，彼が同情を克服したとは言えない。なぜなら，同情から彼はましな人間たちをいたわっているからである。

ましな人間たちの回復は，別の意味を持っている。彼らの困窮は，ツァラトゥストラの思想継承者出現の第1の前兆を意味しているのであった。それならば，困窮から一段前進した彼らの回復は，ツァラトゥストラの思想継承者出現の第2の前兆であると考えてもおかしくはないだろう。

注

1 「ツァラトゥストラ」 S. 283.

2 〃 S. 283.

Ⅵ

第19章は，真夜中の出来事を述べている。ましな人間たちは，最も醜い人間の問いかけによって，自分の変化と回復に気づき，そのことでツァラトゥストラに感謝の念を抱く。感謝の念を抱くことは，彼らが回復したことの最もよいしるしである。ましな人間たちは完全に回復した。さて，ツァラトゥストラの困窮の原因は，待ち続けているしるしが全く現れそうもないという状況であったが，第11章からのましな人間の出現の意味が判明し，また彼らが回復したことによって，彼の困窮の原因は消失してしまった。ツァラトゥストラの疲労は消え，彼の精神は力を取り戻した。つまり，この章は，ツァラトゥストラの回復を描いているのである。

彼は，最後の没落の時が近づいていることを予感し，来たるべき大いなる真昼に酔う。ましな人間たちには自分の話すことは理解されないと知りつつも，彼は永遠回帰の思想を彼らに語る。そして彼は言う。

……いまちょうどわたしの世界は完全になったのだ。真夜中はまた真昼なのだ，――[1]

第10章の場合と同じように，それはツァラトゥストラの錯覚である。彼の世界は決してまだ完全になってはいない。なぜなら，彼はやはりまだ没落を完成していない。しかし，第10章では，彼はひとりきりだった。ところがこの第19章では，彼の思想を受け継ぐ者ではないにしても，彼の周囲にはましな人間たちがいる。それ故，この第19章において彼の世界は，第10章に比べて，より完全になっていると言うことができる。言い換えれば，第19章は，大いなる真昼が更に近づいたという印象を与えていると言える。すなわち，この章は大いなる真昼の第2の前兆を描いているのである。

注

1　「ツァラトゥストラ」 S. 312f.

Ⅶ

最終章「徴候」は，翌日の朝の出来事を記している。ツァラトゥストラは寝床から跳ね起き，洞穴の前に出て，さし昇る朝日に向かって語る。

> よし！　わたしが目をさましているのに，彼らはまだ，あのましな人間どもはまだ眠っている。彼らはわたしの真の道連れではないのだ！　わたしがここで，わたしの山の中で待っているのは，彼らではないのだ。
>
> わたしはわたしの昼の事業におもむきたいのだ。[1]

ツァラトゥストラは昨日中ずっと，同情からましな人間たちをいたわっていた。しかし，この朝になってようやく，今まで眠っていた彼の厳しさが目を覚まし，発言するにいたった。ツァラトゥストラは今や，じゅうぶんに厳しく，強くなった。彼は今，同情を克服した。その時，ついに，しるしが現れる。

> ……彼のまえが明るくなったとき，そこには黄色い，たくましい動物

が一匹，彼の足もとに横たわっていて，彼の膝に頭をすりよせ，愛着のあまり，彼から離れようとはしなかった。そのありさまは，もとの主人に再会した犬さながらであった。しかしハトたちもまたその愛情を熱心に示すことにかけては，シシに劣らなかった。そして，一羽のハトがシシの鼻先をかすめて飛ぶたびごとに，シシは頭をふって，驚きあやしみ，そして笑った。[2)]

笑うシシとハトの群れの出現は，ツァラトゥストラが第3と第4の属性，すなわち，強さと晴れやかさとを獲得したことを意味している。（彼の第1の属性は鷲によって象徴される誇りであり，第2の属性は蛇によって象徴される賢明さである。）ハトの群れを伴った笑うシシは，ツァラトゥストラが自己の知恵の告知者として完成したことのしるしである。

これらすべてのことに対してツァラトゥストラはただひとこと，「わたしの子供たちが近くにいる，わたしの子供たちが」といっただけだった——，それから彼はまったく黙りこくってしまった。[3)]

ここに引用した箇所から容易に読み取れるように，ハトの群れを伴った笑うシシの出現は，ツァラトゥストラの思想継承者出現の第3の・決定的な前兆である。それは，ツァラトゥストラの告知者としての完成とともに，彼の思想継承者出現の近づいたことをも意味するが故に，彼の最後の没落のしるしとなりうるのである。

その間にましな人間たちが目を覚まし，洞穴の戸口に出てきた時，シシが彼らをめがけて突進したので，彼らは悲鳴をあげて逃げ去り，姿を消してしまう。このことは，彼らに対する同情を克服したツァラトゥストラが，もはや彼らに容赦しないことを表わしている。彼は考えに耽り，昨日と今日の間に起こったことのすべてを理解する。同情からましな人間たちを育て上げようとしたのは，彼の大いなる愚行であった。同情は，彼の最後の罪であり，告知者としての最後の障害であり，彼を倒す斧であった。彼は

ましな人間たちへの同情を完全に克服して，彼らに対して愛のより高い態度を取る。すなわち，彼らに容赦しないのである。ツァラトゥストラは熟した。新しい真理の告知者として完成した。ついに，彼の時がやって来た。ツァラトゥストラの大いなる朝が明けた。今から，大いなる真昼が始まる。ツァラトゥストラは，暗い山からさし昇る朝日のように，燃えながら，力強く，洞穴をあとにする。

注

1　「ツァラトゥストラ」　S. 315.
2　　〃　　S. 316.
3　　〃　　S. 316.

Ⅷ

第1章は導入部として，ツァラトゥストラの誘惑，彼の思想継承者の出現，大いなる真昼の実現という3つの主題を提示している。第2～9章は，同情によるツァラトゥストラの誘惑の第1局面と彼の思想継承者出現の第1の前兆を描いている。第10章は，幸福によるツァラトゥストラの誘惑の第1局面と大いなる真昼の第1の前兆を描いている。第11～18章は，同情によるツァラトゥストラの誘惑の第2局面と彼の思想継承者出現の第2の前兆を描いている。第19章は，幸福によるツァラトゥストラの誘惑の第2局面と大いなる真昼の第2の前兆を描いている。そして最後の第20章は終結部として，ツァラトゥストラの2つの誘惑の解決と彼の思想継承者出現の第3の・決定的な前兆を描き，大いなる真昼の実現という主題を再度提示している。

以上のように，第4部全体は主題的に6つの部分に分けられる。しかも，第1章が第20章に，第2～9章が第11～18章に，第10章が第19章に，それぞれ対応しているのである。ところが，先に述べたように，これら3組の部分は，形式的・時間的にも対応しているのであった。つまり，第4部においては，これら3組の部分が，形式的・時間的・主題的という3重の対応のうちに，3つの主題を展開させているのである。

3つの主題のうち，ツァラトゥストラの誘惑については，同情によるものと幸福によるものとの2つが描かれている。しかし先に述べたように，この2つの誘惑は同じ原因から生じてきたものであった。そしてこの主題は，第4部の冒頭において初めて現れ，第4部の終わりで完全に解決されている。つまり，ツァラトゥストラの誘惑（の克服）＝彼の告知者としての完成が，第4部の第1の主題なのである。

他の2つの主題は，第4部において解決されてはいない。ツァラトゥストラの誘惑の克服と，彼の思想継承者出現の近接とは，彼の最後の没落の時が来たことを示すものである。従って第4部は結局，ツァラトゥストラの最後の没落の時の到来を描いているのだと言えよう。そしてそのことは，大いなる真昼を用意するものである。言い換えると第4部は，第3部の終わり近くで描かれたツァラトゥストラの深い内面的転回から，「ツァラトゥストラ」全体のクライマックスへと筋が運ぶための2つの要件，すなわち，新しい真理の告知者としてのツァラトゥストラの完成と，彼の思想継承者出現の近接とを描くことによって，大いなる真昼実現の準備を行なっているのである。そのことが，「ツァラトゥストラ」全体に対する第4部の構造的機能である。

付 記

本稿は，筆者が昨年（1975年）1月，名古屋大学大学院文学研究科に提出した修士論文 „Der große Morgen Zarathustras —— Eine Untersuchung von Friedrich Nietzsches ‚Also sprach Zarathustra' ——" の後半部（S. 20～S. 40）を中心にしてまとめたものです。なお，「ツァラトゥストラ」の引用はすべて，河出書房刊行のもの（世界の大思想25・高橋健二・秋山英夫両氏訳）から，勝手ながら一部語句を変えて，借用させていただきました。